特集

終戦から77年 語り継ぐ悲劇

楡の木の丘に「山桜の歌」が聴こえる

「樺太・大平炭鉱病院看護婦集団自決」の真相

ノンフィクション作家
川嶋 康男

武道沢の楡の木（斉藤マサヨシ氏撮影）▶

戦後77年を迎えるが、ロシアのウクライナ侵攻という悪魔の所業を現実として接したとき、北海道においては太平洋戦争末期の樺太戦が蘇る。（文中敬称略）

ソ連軍侵攻と死の彷徨

昭和20年8月16日、天皇のポツダム宣言受諾により無条件降伏した翌日、樺太西海岸の塔路・恵須取に侵攻したソ連・北太平洋艦隊は、沿海州ソフガワニ港を拠点とした上陸船団を編成しており、町は襲撃され、人々は避難して南下した。

国境線からの本格的な攻撃は9日に始まったが、塔路・恵須取はソ連艦隊による艦砲射撃と陸戦隊による上陸侵攻であった。

恵須取郊外、大平にあった大平炭鉱病院では、市街地でのソ連機の攻撃による負傷者が殺到し、看護婦は応急手当てに追われていた。

そうした中で看護婦たちにも防空壕への避難指示があり、重症患者とともに避難を試みた。家族が迎えに来てともに避難していく看護婦もいたが、23人の看護婦は戦況の悪化とともにさらなる避難を強いられた。

北に位置する塔路への道路はソ連軍南下のため南方面・上恵須取に変えざるを得なかった。その行程が山道経由のため、けもの道同然の中の逃避行となっていた。いかに若さがあるとはいえ抗しきれない苦行道となった。

▲大平から武道沢までの道程地図

大平病院から8キロほど南下した恵須取川の大支流、武道沢まで歩いてきたところ、上恵須取から引き揚げてきたという一団に出会った。

久々に耳にした情報は、上恵須取にもすでにソ連軍が侵攻し、この地が決戦場だと気勢を上げる叫び声であった。北にも南にも進むことができない、進路も退路も断たれたと絶体絶命のピンチと捉えた一行に、これから先の選択肢は限られた。

二山を越えて辿り着いた場所は武道沢に広がる農場。一息入れる間も惜しむように、それぞれに背負って来た荷物を事務所近くの空き地に小高く積み上げると、さらに丘に登ることにした。いずれも高橋婦長が率先した。

星空の闇にうっすらと浮かぶ楡の大木を囲むように腰を下ろした。めいめいが心の荷物を下ろしたように語り尽くす。時には自慢の歌も歌い、全員の手拍子で盛り上がる。夜明けまで語り尽くし、歌い尽くした。

中でも石川ひさの愛唱歌「山桜の歌」に誰もが涙した。一人二人と言葉が宿る。ほぼ一昼夜を一緒に過ごしたまま、夜明けの日が昇り始めると目覚めた。

続きは『月刊クォリティ』本誌をご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
https://qualitynet.co.jp/koudoku/

○お電話でのお申し込みはこちらから
TEL 011-644-0101
（9:00 ～ 17:30　土日・祝日をのぞく）